



# 日本SPF豚協会だより

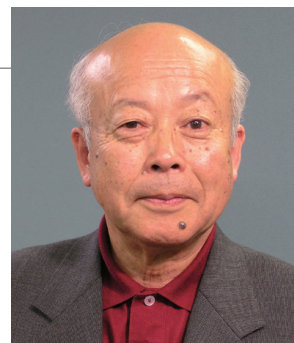
2020. 1  
No.78

## 提言

### SPF養豚、これからの50年 —さらなる発展をめざして

日本SPF豚協会最高顧問

**赤池 洋二**



明けましておめでとうございます。今年も日本SPF豚協会及び  
会員各位のご奮闘を心からお祈りいたします。

数年前、PED(豚伝染性下痢症)が大流行し、多くの認定農  
場も感染に見舞われました。近年では中部地方で発生したCSF  
(豚コレラ)が徐々に感染域を拡げました(今のところ、SPF豚  
農場では感染はありません)。また、ASF(アフリカ豚コレラ)  
の侵入も懸念されます。これらの疾病はSPF豚協会が定める防  
疫設備基準と防疫管理基準を遵守することで感染を防ぐことが  
できるものばかりです。にもかかわらず、PEDが猛威を振るった  
際、多くのSPF豚認定農場が感染に見舞われたのはなぜでしょ  
うか? 私には防疫管理のどこかに見落としがあったとしか考えられ  
ません。人、物、動物を農場の内と外で完璧に区分するという、防  
疫管理の原則(外部との遮断・隔離)が守られていれば感染が起  
こるはずはないのですから。

協会のSPF豚農場認定規則は、防疫設備基準と防疫管理基  
準を設けていますが、基準と規則を勘違いしているのではないかと  
考えています。決められた規則に従っているだけでは、日常の  
防疫管理に甘さが生まれ、形だけになってしまいがちです。一方、  
基準は守らなければならない最低限のものであって、それを上回  
る工夫への期待も含んでいます。たとえば、場外を走ってきた車  
を水洗、消毒するとき、**規則に従って、車の汚れを落として綺麗に  
してから消毒する(規則を守る)のと、車の汚れと一緒に付着して  
きたかもしれない病原体を洗い流すことが洗車の目的で(洗車が  
丁寧になる)、最後の仕上げに消毒薬を使って病原体を完全に排  
除する(基準に工夫を加える)ことを意識する**のとでは、作業の精  
度に圧倒的な差が生じます。

シャワー・インに対する考え方はさらに重要です。①シャワー・イ

ンは規則だから実行する→防疫に関する意識が高くないため、場  
内作業全般でも防疫管理が疎かになりがち。②シャワー・インは  
外部から付着してきたかも知れない病原体を洗い流し、場内に持  
ち込まないために実行する→シャワーの時から防疫を意識してい  
るため、場内作業も常に防疫優先で進められる—このふたつの考  
え方では、長年蓄積されると大きな差が生じます。古くはAD(オー  
エスキー病)、近年ではPED流行の際に、汚染地域にありながら  
感染を逃れた農場がありました。SPF状態を堅持するためには、  
農場の休憩時や昼食時など、常に防疫問題が話題になるような職  
場の雰囲気作り、防疫管理の高度化が重要だと思います。

協会の防疫管理基準及び防疫設備基準は一般養豚農場にも取  
り入れられつつあり、SPF豚農場の特異性が薄れつつあります。  
また、これまで評価されてきたSPF豚認定農場の生産性の高さ、  
生産された豚肉の風味の良さ・柔らかさ・調理時の臭みとアクの少  
なさ、などの特徴も目立たなくなってきました。

さらに、安価な食肉の輸入増が我が国の養豚界を圧迫しつつあ  
ります。世界に伍していくためには、さらなる技術開発と生産性の  
追求とともに、究極の疾病防御方式であるSPF養豚によって生産  
される豚肉の特徴を正確に消費者に伝えることが重要だと思いま  
す。それには協会のホームページを活用することも一策ではないで  
しょうか。会員農場がそれぞれのホームページに日常の生産情報  
(薬剤・ワクチンの使用状況など、豚肉の安全・安心を支える情報  
を含む)を公開し、協会のホームページにリンクさせることにより、  
消費者がいつでも個々の認定農場の生産情報を確認することがで  
きるようにする—これこそが究極のトレスビリティであり、「日本S  
PF豚協会認定農場産豚肉」の差別化、SPF養豚普及への方策  
でもあると私は考えます。地道な努力の蓄積が力になります。



# 協会創立50周年記念セミナーを振り返って

前号でお知らせした通り、昨年9月5日、東京都千代田区KKRホテル東京にて開催された協会創立50周年・法人化15周年記念セミナーの概要を掲載します。

## 第1部

### 生産成績最優秀CM農場表彰式

#### 浜岡隆文・選考委員長講評

表彰制度は改善のヒントを共有できる場であり、協会会員の切磋琢磨の場でもある。これからも大いに活用されたい。

3年間連続でAグループに位置する農場を対象に、直近3年間の平均成績で最優秀を決定している。現場の努力は半半可でないことが想像され敬意を表す。これからも、抗菌性物質の使用を低減しながら飼育管理技術の高みを目指すという、相反するハードルに挑戦し続けていただきたい。

#### 総合生産成績最優秀農場・(株)広島ポーク・永野雅彦社長

安全・安心で美味しいものを安く生産することを目標にしてきた。そのためには、①健康で生産能力の高い種豚の確保、②この種豚飼育に適した飼料給与、③施設・環境のコントロール、④厳重な防疫対策と衛生管理、⑤人材の確保の5項目は必須である。さらにその成果をみるには1母豚の生涯離乳豚頭数が重要で、離乳豚をいかに安く作るかに注力している。

#### 商品化頭数最優秀賞農場・(農)八幡平ファーム・大泉俊昭専務理事

この賞を連続して頂けるのは、職員の努力の賜物である。グループ全体で種豚4500頭、肉豚12万頭出荷を達成、1母豚当り離乳実績はグループ平均で29頭というハイレベルになっている。さらに一段と高い努力を重ね、チャンピオンを防衛したい。

## 薬剤耐性 (AMR) 対策について

### 農林水産省消費・安全局畜産安全管理課・小澤真名緒課長補佐

薬剤耐性対策アクションプランは2016年から始動、期間は2020年までの5年間。畜産分野では、慎重使用の推進強化、人の医療分野との連携推進、愛玩動物の調査開始、養殖水産動物用医薬品使用への専門家関与システムの適用、国際協力の強化、などに取り組む。

薬剤耐性リスク管理検討会を実施

① MRSA (メチシリン耐性黄色ブドウ球菌) に関するリスク管理措置  
・日本では感染報告はないが欧州では問題発生。テトラサイクリン系抗剤や亜鉛等の重金属を使用するとMRSAの増加につながる恐れがある。  
・日本の浸潤状況や人と家畜の接触機会などの欧州との違いを整理。

② テトラサイクリン系抗剤に関するリスク管理措置  
・家畜における抗剤使用量の4割以上がテトラサイクリンである (主に豚で、経口投与)。近年、増加傾向。耐性率も高い (2015年、豚55.1%)。テトラサイクリンの耐性率目標値を設定 (2020年、33%)。  
・テトラサイクリン系抗剤と事故率の間に相関はない。なぜ使用量が減らないのか。  
・テトラサイクリン系抗剤の使用量を半分に減らすと、耐性率は20%近く減少 (オランダの事例)。今後、不必要な投与の禁止、予防的投与の規制強化に取り組む。

飼料添加物の指定取消し状況

① リン酸タイロシン—飼料添加物としての指定取消し (2019.5.1施行)。  
② テトラサイクリン系物質 (2成分) —飼料添加物としての指定取消しの手続き実施中 (12月施行予定)。

## 第2部

### 祝辞 筒井俊之・農研機構動物衛生研究部門長

諸先輩方の長年の弛みないご尽力に誇らしさを感じます。26年ぶりに発生したCSFは終息が見えず、さらに、ASFの侵入が懸念される今日、防疫対策は益々重要度増しています。家畜疾病を制御し、健康な豚を、効率的に生産するSPF養豚の使命を全うし、末永く発展されることを祈願いたします。

### 小林秀樹・日本SPF豚研究会会長

1965年の1農家当りの飼養頭数は14.5頭。その時代にいち早くSPF事業に取り組みられた先輩たちの意気込みには頭が下がります。その後のSPF豚の拡大をみれば、いかに養豚の大規模化、生産力向上に貢献してきたか。しかし、現在コンベ農場も成績や肉質が向上しうかうかしてられません。当研究会も、消費者に望まれる豚肉生産のお手伝いが出来ればと考えています。協会のさらなる発展を祈願いたします。

### 記念講演「わが国におけるSPF養豚の始まりから現在まで」

#### 赤池洋二・協会最高顧問

実験動物としてのSPF豚の実用化を目指してSPF豚の歴史がスタートした当初、個人的にはSPF研究からは逃げ腰だった(笑)。1963年(昭和38年)家畜衛生試験場(家衛試)にSPF研究班が誕生。1965年(昭和40年)、家衛試にSPF作出施設が完成し、そこでSPF豚の作出手術が行われ成功した。翌年NHKが「無菌の豚をつくる」というタイトルで番組を放映、SPF豚を紹介したが、この間違った認識がSPFと無菌を混同する遠因となる。

当時、波岡茂郎先生(家衛試)がSPF養豚の実用化を関係機関に働きかけたが、反対意見の嵐だった。いわく、SPF豚は箱入り娘で抗病性がない、手術で遺伝的資源が失われる、血統登録に障害が生じる、この研究は獣医学の分野ではない、飼料に抗菌性物質を添加すれば疾病コントロールは容易だ、豚肉生産の向上は育種改良と新飼料開発で十分達成されるなどなど。SPF養豚に興味を示した自治体は9県1市(産道消毒を提唱)だった。後に4県が加わった。

SPF養豚検討会に参加した民間企業は6社だった。1966年(昭和41年)にアミノ飼料中央研究所(当時横浜市戸塚区)でプライマリーSPF豚の飼育実験を開始した。多々問題はあったが、1968年(昭和43年)SPF豚飼育が現実味を帯びてきたので、埼玉県鳩山村(当時)に母豚200頭規模のSPF豚農場を開設した。育成管理技術、防疫管理技術の蓄積は出来たが、肝心の種豚販売は頓挫。当時種豚販売は血統がものを言う時代、氏素性の不明なSPF豚は見向きもされなかった。同時期、住商飼料畜産の鬼怒川農場が開設したが、アミノ飼料同様、SPF種豚販売は苦戦を強いられた。しかし、飼料販売店の協力と住商飼料畜産社長のリーダーシップにより地道な普及活動が続いた。10年間にわたり、孤軍奮闘であった(アミノ飼料はSPF豚事業から撤退)。それは1980年(昭和55年)に合併により伊藤忠飼料が誕生、SPF豚事業に本格的に取り組むまで続いた。

また、千葉県もアミノ飼料、住商飼料畜産と時期をほぼ同じくしてSPF養豚の実用化に着手し独自にSPF豚作出施設を建設。県内の中核農場(GP農場)で生産販売を開始した。しかし、技術・知識の蓄積がなされず、防疫管理の指導と実践農場の防疫管理意識のフォローアップが





認定農場から提供いただいたSPFポークを使った料理の数々

祝賀会の乾杯に先立ち、和洋中の料理長が腕によりをかけた料理を紹介するKKRホテル東京営業部の大橋達彦さん



不足し頓挫している。伊藤忠飼料のSPF豚事業参入よりやや遅れて、日本農産工業（1989年：平成元年）、JA全農（現全農畜産サービス、1991年：平成3年）、ホクレン（1991年：平成3年）がSPF豚事業に参入、現在の構成になった。

わが国の生産ピラミッド（原々種豚を飼育する農場を頂点に、原種豚、PS生産農場、CM農場で構成されるピラミッド構造）は5つで、豚の垂直移動を基本としている。遺伝子のやり取りを目的として、水平移動すると、衛生レベルが疾病汚染度の高い農場に同一化してしまう。

日本SPF豚協会設立は1969年（昭和44年）。SPF豚農場の増加に伴い、1991年（平成3年）には協会を生産者団体とし、研究者等生産者以外の会員を主とした日本SPF豚研究会が分離独立した。協会は2004年（平成16年）念願の法人化を果たし、有限責任中間法人に。その後、法人法の改正で2008年（平成20年）一般社団法人となった。

1980年代、SPF豚生産技術を飛躍的に向上させた技術が生まれた。一つは、ディスプレイタイプのビニール袋内装型段ボールアイソレーター。新生子豚の糞尿の発酵抑制には、給水性ポリマーを使用した。もう一つは食滞を起こさない人工乳の開発である。これで、プライマリー子豚の事故率は皆無となった。ほかに、さまざまな「未知との遭遇」があった（註；認定制度の確立などと併せ50年史に詳細を掲載）。

協会は抗菌性薬剤の使用低減にこだわっている。いまの上昇傾向は好ましくない。抗菌性物質の使用金額の多い農場と少ない農場で、耐性菌の出現率を調査したが、使用金額の少ない農場の出現率が低いことがわかった。今後は使用金額の多い農場の使用量を減らしたとき、耐性菌の出現率が減少するかどうかの検証が残る。

また、SPF種豚は非認定農場にも導入されている。両者の肉豚出荷頭数を合算するとSPF豚由来の出荷肉豚のシェアは2割以上になると推測される。

**基調講演「SPF豚の今後の展望」仲川直毅・中京学院大学専任講師**  
始めに、SPF豚肉は今後まだまだ伸びる可能性を大いに秘めている

という結論から申し上げる。

まず、農林水産省の畜産統計から類推すると、国内の生産力の低下が見て取れる。国内のと畜頭数はPEDの影響を受け2014年から80万頭弱減少（2018年度：16,390千頭）。それに比し、輸入豚肉は品質向上と価格の安さで増加している。また、国産豚肉の枝肉価格、部分肉価格、小売価格は上昇傾向。輸入豚肉は部分肉価格、小売価格とも安定している。次に、消費者サイドから見ると、年間家計消費は増加傾向にある。特に、2001年からは5kgを超えてきた。これは1回の消費量が増加していることに起因する。豚肉購入時に重要視するのは購入しやすい価格かどうかということと、国産かどうかである。また、消費内容を見ると、肉食で消費する家庭が圧倒的に多く、外食では月に一度も利用しないとする消費者が多い。これは、家庭内での調理のしやすさ、メニューの多さによると思われる。購入先はスーパーが圧倒的で、購入頻度は週1回、週2～3日が多い。

スーパー等では、購入しやすい価格での販売が必要である。そのためには、低コスト生産体制の構築が必要不可欠。しかし、購入しやすい価格の追及は、低価格化、価格競争を引き起こし、収益を圧迫する。

このような状況下で、SPF豚肉を販売促進するためには、SPF豚肉の良さ、他の豚肉との違いを流通業者や消費者に知ってもらう必要がある。今後、日本の人口は減少し、少子高齢化、生産年齢人口の減少、少数世帯の増加を迎える。当然、豚肉消費のニーズも変化してくる。

SPF豚肉の良さとは何か。生まれてから出荷されるまでの健康状態が良好なことによる、安全性の高さだろう。ここ5年、消費者の豚肉に対する不安は少し薄らいでいる。しかし、依然として不安を抱いている消費者もおり、その数は少ないとは言えない。そこで、SPF豚の存在や安全性の高さを知ってもらう取り組みが必要になる。

さらに、現在の外食産業の市場規模や中食の広がりを見ると、中食、外食市場への販路開拓、拡大も重要になる。

また、美味しさという視点から考えると、良い調理方法のアピールも必要ではないか。

ニパウイルス感染症は、1998～99年にかけてマレーシア、シンガポールで初めて確認された豚とヒトの人獣共通感染症です。その後バングラデシュやインド、2014年にはフィリピンでも発生が確認されています。ニパウイルスの自然宿主は果実を主食とするオオコウモリ(フルーツバット: Flying fox)で、オオコウモリの居住地域である熱帯雨林を切り開いて多頭集約型の養豚を展開したため、オオコウモリからブタへの感染につながったと推測されています。わが国での発生はありません。しかしながら地球温暖化によってオオコウモリの生息域、飛来域は広がっており、沖縄や九州地方にウイルスを保持したオオコウモリが飛来してくる可能性が危惧されています。日本を含めた近隣東アジア諸国への侵入、感染拡大のリスクは高いと考えられています。

### 原因と病態

本病の病原体であるニパウイルスは、パラミクソウイルス科、ヘニパウイルス属(Paramixoviridae, Henipavirus)の1本鎖RNAウイルスです。粒子の直径は約40～600nmと多形性を示し、エンベロープを持ちます。ニパウイルスの名前はウイルスが最初に分離された脳炎患者の出身地の地名(マレーシア、スンガイ、ニパ)に由来します。マレーシア、シンガポールでの発生では、豚において肺炎、脳炎を主徴とした致死性感染症の大流行をもたらし、ヒトでは脳炎を主徴として、この期間に養豚場や食肉検査所関係者を中心に265名の感染者、105名の死亡者(致死率40%)が報告されました。

マレーシアでは感染拡大を防ぐために100万頭を越える豚の殺処分(全国の豚の約45%)、2,000カ所近くの養豚場の閉鎖(全国の養豚場の約50%)が行なわれ、同国の養豚産業に壊滅的な打撃を与えました。ウイルスはオオコウモリから豚、豚から豚、豚からヒトへと感染します。バングラデシュでの発生では、オオコウモリからヒトへの豚を介さない感染や、ヒトからヒトへの感染も確認されています。

感染豚の潜伏期間は4～14日で、発症前から尿や鼻汁中にウイルスを排泄します。臨床症状は日齢により異なり、離乳豚や育成子豚では重篤な咳を特徴とする急性肺炎が多くみられます。成豚では神経症状が強く現れる傾向がありますが、無症状のまま急死する場合があります。また、妊娠豚が感染した場合には流産がみられることがあります。豚における致死率は5%以下ですが、人では致死率は40～75%と高くなります。豚以外にも馬、犬、猫などの感染が報告されています。豚間および豚から人への主たる感染経路は、感染豚の体液や分泌液(尿や鼻汁等)を介した接触感染と考えられており、畜産食品を介した人への感染事例は報告されていません。解剖時の肉眼病変は肺のモザイク状の多発性赤色肝変化を特徴とします。肺水腫も認められます。死亡豚では血液を含んだ泡沫状の鼻汁が顕著にみられ、気管内に泡沫状滲出物が充満していることが多くみられます。脳脊髄に肉眼病変は認められません。組織学的に、肺では気管支上皮細胞や肺胞上皮細胞の合胞体巨細胞形成を特徴とした気管支間質性肺炎がみられます。合胞体巨細胞には好酸性細胞質内封入体が多数観察されます。また、血管内皮細胞の合胞体巨細胞形成を特徴とする血管炎も全身諸臓器で観察されます。神経症状を示した豚の脳では囲管性細胞浸潤を特徴とした非化膿性脳炎が観察されます。壊死病変、血管病変、合胞体巨細胞に一致して、免疫組織化学的にニパウイルスのウイルス抗原が観察されます。

### 診断と予防

有効な治療法やワクチンは開発されていません。国内では感染性ウイルスを用いない検査が可能ですが、確定診断は高度な封じ込め施設内で行う必要があり、現在国内では実施できません。なお、検査・解剖時の人への感染リスクが高いため、疑いのある家畜を扱う場合は手袋、マスク、ゴーグル、グローブ等の個人防衛具を厳重にして、感染防護措置をとる必要があります。

## ブタのウイルス病

連載 No.23



# ニパウイルス感染症

農研機構 動物衛生研究部門  
病態研究領域 病理ユニット  
上級研究員

山田 学



連載

種豚の能力を最大限発揮させるための飼養管理、栄養管理のポイント

# 繁殖成績を引き出すための 種豚栄養管理



中部飼料(株)研究技術部養豚グループ 石川靖之

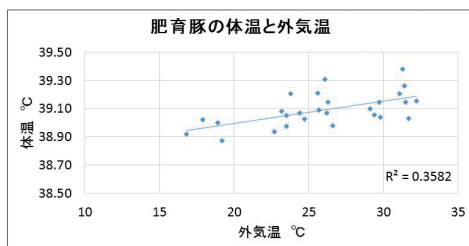
今年の夏～秋の種付けはいかがでしたでしょうか？地球温暖化の影響が年々暑くなっているように思え、夏場の種付けへの影響が心配されますが、そもそもなぜ夏から秋にかけて繁殖が難しいのでしょうか？夏場の種付けが難しい理由のひとつは授乳中の飼料摂取量不足です。高温多湿な飼育環境となってしまう日本の夏に対し汗腺があまり発達していない豚は体温調整が不得意であり(図1)、結果摂取量低下を招き、次産に向けたボディコン回復が難しくなります。体の熱を下げるためには日頃からのボディコン管理(太らせ過ぎない)も重要ですし、飲水の強化や母豚の体に涼しい風を当てる工夫などが必要でしょう。

そしてもう一つ種付けが難しい理由として豚の妊娠期間があります。豚の妊娠期間は114日で約4か月です。仮に8月15日～9月15日に種付けを行うと12月初旬から1月初旬の寒い冬に分娩となり、自然環境下においては子豚の生存率は一気に下がります。そこで豚は夏～秋の繁殖行動(種付け)を自然と避けるようになったと考えられ、逆に晩秋から冬場の種付けは摂取量回復、ボディコン安定。さらに寒い冬を子豚は母豚のお腹の中で過ごし暖かい春に生まれるため、この時期の種付けは夏～秋と比較して問題は少ないのではないのでしょうか。海外文献のデータや弊社農場データでは繁殖成績に季節性が見られ、豚は周年繁殖動物といっても季節に影響される

ようです(図2)。

では、豚はどうやって季節を感じ取っているのでしょうか？ひとつは環境温度もあると思うのですが冷夏であろうが猛暑であろうが変わらない自然現象として日長時間があります。鶏や植物同様に日の長さの長短によって季節を感じ取り、夏至を境に日長時間が短くなっていくことで、季節が秋に向かっていくことを知ります。目から取り込まれた日の光(光刺激)は脳内でメラトニンというホルモンの分泌信号に切り替わり、体の各器官へ日長時間の変化(季節変化)を伝えています。このメラトニンは光刺激を分泌量に変えている為、畜舎内で照明器具を利用してメラトニン分泌量を調整することが可能です。それがいわゆるLDコントロール(明暗制御)です。方法としては豚舎内にLEDライトなどの照明器具を設置して豚の目の高さで本が読める程度の明るさ(300～500ルクス)にします。電球の色は自然光に近い昼白色がよいと思います。そして照明時間は16時間点灯、8時間消灯とし、常に明るい時間が長い状態(長日環境)になるように設定し、年間通じて行ってください。時間設定はタイマーなどを取り付ければ可能です。LD制御は妊娠交配舎だけでなく、分娩舎、若雌育成舎など繁殖に関わる設備への設置を行うとよいと思われます。LDコントロールだけで夏から秋の繁殖が全て解決するわけではありませんが、来夏に向けて参考にしてみてください。

図1 豚の体温と外気温の関係



弊社農場にて測定した肥育豚の体温の平均と測定時前後の外気温を比較。外気温の高い時期は体温も高い傾向にあり。(n=711)

図2 季節の違いと繁殖の関係

項目	季節による繁殖成績への影響		季節と総産子数の関係	
	春	夏～秋	季節	一胎当り平均総産子数
母豚数	135	175	春 3～5月	12.58頭
再発情頭数	5	14	夏 6～8月	12.48頭
不受胎頭数	5	22	秋 9～11月	12.60頭
流産頭数	1	4	冬 12～2月	12.35頭
分娩率	91.9%	77.1%		

(O'Leary, Final Report to Pork CRC, 2010)

(2007年～2017年までの弊社農場で飼養したWL母豚1533分娩の平均。冬場は他の季節より0.1頭以上産子数が少ない傾向にある)



## 本田英三氏 (日本SPF豚協会二代目会長) を偲んで

日本SPF豚協会二代目会長であった本田英三氏(元・住商飼料畜産(株)社長)が天寿を全うされ、令和元年(2019年)9月12日にご逝去(享年105歳)なさいました。心からご冥福をお祈り致します。

本田元会長とSPF豚との関わりは昭和40年代までさかのぼります。この頃、農林省家畜衛生試験場の波岡茂郎博士(後に北海道大学教授)の提唱で始まったSPF養豚への挑戦は、自治体では、千葉県、新潟県、千葉県、岡山県、横浜市、民間ではアミノ飼料(株)(アミノ飼料と略、現・伊藤忠飼料(株)、住友飼料畜産(株)(住畜と略、現・(株)サンエスブリーディングに事業継承)、(株)埼玉種畜牧場(サイボクと略)の三社のみでした。

当時SPF養豚は国の賛同が得られず、民間主導で進めざるを得ない状況のもとで、アミノ飼料と住畜は昭和43年(1968年)、サイボクは翌年、SPF養豚の事業化に着手しました。昭和44年(1969年)、日本SPF豚協会が発足すると、会長に有吉修二郎氏(元・アミノ飼料研究所長)が就任しました。しかし、アミノ飼料はSPF養豚の将来性を見出せず、昭和48年(1973年)年に事業を子会社に移管して撤退、サイボクも間もなく撤退したため、協会の主体は住畜のみとなってしまいました。

そこで、当時住畜の社長であった本田英三氏が昭和48年(1973年)、有吉修二郎氏の後任として二代目会長に就任されました。当時わが国の養豚は小規模の庭先養豚が主流で、米国・ネブラスカ大学で開始され瞬く間に養豚先進国に広がったSPF養豚の情報は、まるで別次元の出来事で、想像すら

できないものでした。本田会長は住畜の社運をかけて、養豚農家へのSPF養豚の普及に挑み、孤軍奮闘、悪戦苦闘を強いられること10年以上に及びました。そして、昭和50年代(1970年代後半)から、ようやくわが国でも養豚が事業として成立するようになりました。一旦SPF豚事業から撤退したアミノ飼料も伊藤忠飼料として再出発(昭和55年、1980年)する際の目玉事業としてSPF養豚に復帰(昭和58年、1983年)しました。この頃になると住畜のSPF豚事業も収益を生むようになり、優良子会社として親会社から表彰されたこともあり、本田会長の苦労もようやく報われようとしていました。

それから数年後、本田氏が住畜を定年で退職されると、協会会長の座が私にまわってきました(昭和61年、1986年)が、その直前、同氏が私にしみじみと述べられたことがあります。「SPF豚にかかわって10年余、住畜全体で稼いだ利益のほとんど全てをSPF豚事業の穴埋めに注ぎ込んできた。その苦労が実り、ようやくその成果を享受する 때가来ましたよ」。

先覚者の苦労と重みを感じるお言葉でした。そのホッとした表情は今も忘れられません。もう少し定年が遅ければ、成果の余韻を楽しまれる時間をもっとあったのではないかと残念に思います。

本田氏は協会だよりを毎回楽しみにしておられたと聞いていますが、今も日本SPF豚協会および会員の活動を、あの世から期待と慈愛の眼差しで見つめておられることでしょうか。合掌

日本SPF豚協会最高顧問 赤池洋二

### 協会からのお知らせ

#### ●ちくさんフードフェア出展を中止しました

昨年10月12日(土)、13日(日)、神奈川県川崎市の(財)日本食肉流通センターで開催される予定だった「ちくさんフードフェア」は、台風19号接近に伴い、中止となりました。

協会も出展を断念いたしました。試食用豚肉、アンケート調査用景品等ご手配いただいた関係各位、また

準備にご協力いただいたピラミッドの方々にも多大なるご迷惑をおかけいたしましたこと、お詫び申し上げます。引き続きご理解・ご協力のほど、お願い申し上げます。

昨年の台風では、9月の15号と併せて、会員農場の中にも甚大な被害に遭われた方がおられます。心よりお見舞い申し上げます。

## プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



### SPFポークの 南蛮つくね

●レシピ提供・和食居酒屋 和顔別館 OKARU  
料理長 五艘克彦 (北海道札幌市)

今回は豚肉と青唐辛子たっぷりの、シンプルでピリッと辛い大人のおつくねです。照り焼きソースが辛みを和らげてくれそうです。ぜひお試しください。

#### ●材料 ● (4人分)

- ・ SPFポークひき肉 500g
- ・ 青とうがらし 100g
- ・ 照り焼きソース (市販) 適量
- ・ 付け合せ野菜 お好みで

#### <A>

- ・ 山芋 (おろしたのもの) 50g
- ・ 卵 1個
- ・ パン粉 40g
- ・ おろししょうが 15g
- ・ しょうゆ 大さじ1
- ・ 酒 小さじ1

- ・ 片栗粉 大さじ1

#### <B>

- ・ 塩 4g
- ・ バター 1g
- ・ うまみ調味料 少々

#### ●つくり方 ●

- ① 青唐辛子は種をよく取り除き、みじん切りにします。
- ② ひき肉にBを加えて粘りが出るまでよく練ります。
- ③ ②にあらかじめ合せておいたAを加

え、①も入れてさらに練ります。

- ④ お好みの大きさに成形し、フライパンで焼き上げ照り焼きソースを絡めます。
- ⑤ 器に盛り、お好みの野菜を添えて出来上がりです。

#### ★五艘シェフからのアドバイス

青とうがらしは種を取り除くと辛みが和らぎます。焼き上げるときにフライパンに少量の水を入れると短時間でふっくらと仕上がります。

## 認定情報

### ●2019年12月認定農場 (有効期間：2019年12月5日から20年12月末日まで)

北海道・ホクレン滝川・スワインステーション、全農飼料畜産中央研究所上士幌種豚育種研究室、(有)道南アグロ、富良野スウィンファーム(有)、(有)サクセス森、青森県・(有)ふなばやし農産、同第3農場、神明畜産(株)八戸ファーム、岩手県・(有)ケイアイファウム玉山農場、(株)さいとうふあーむ繁殖農場、同肥育農場、(有)胆沢養豚、カワムラSPFファーム、北日本JA畜産(株)本社農場、(株)のだファーム第一肥育農場、秋田県・(有)ポークランド、(株)ユキザワ雪沢農場、山形県・(有)最上川ファーム、宮城県・(株)しまぎき牧場蔵王高原農場、福島県・神明畜産(株)川内ファーム、(株)フリーデン都路牧場、茨城県・(有)常陸牧場、千葉県・(株)ツナシマ、(株)愛東ファーム銚

子農場、同東庄農場、高森養豚、小長谷養豚、(有)菅井物産SPF農場、岡山県・岡山JA畜産(株)吉備農場、同田淵農場、広島県・(株)広島ポーク、愛媛県・(株)ユキザワ大川農場、大分県・JA北九州ファーム(株)直入農場、同安岐農場、長崎県・大西海ファーム、(有)芳寿牧場口之津牧場、同国見牧場、同島原農場、同新島原農場、同新国見農場、(有)ワールドファーム有明農場、宮崎県・ジャパンミート(株)夏尾農場、(有)ナガトモ、鹿児島県・(有)エクセルファーム湧水農場、そお元気ファーム(株)持留農場、同久保崎農場、(株)シムコ鶴田事業所(以上47農場)

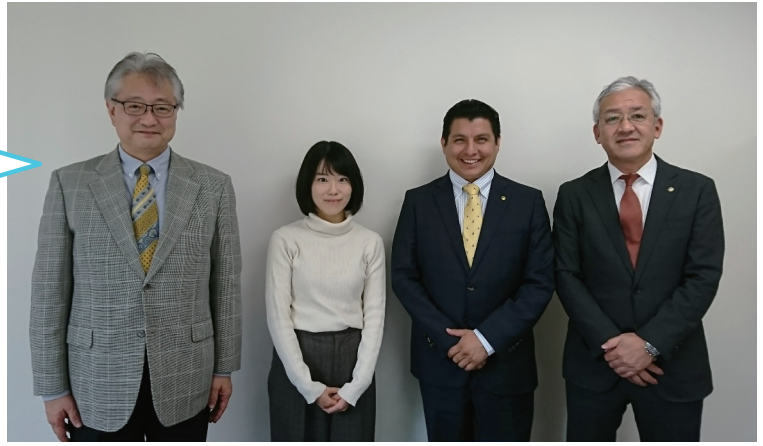
※次回認定委員会は2020年3月6日(金)の予定





**東亜薬品工業株式会社**  
(東京都渋谷区)

人も豚も健康の源は腸にあり、  
プロバイオティクスで安全、安心な  
豚肉生産に貢献



東亜薬品工業(株)本社営業本部で。右端が河野春彦執行役員、左端が福井和夫学術営業部長

前号に続いて賛助会員のご紹介です。

東亜薬品工業(株)は1948年創立の益生菌剤メーカーとして、プロバイオティクス(人や動物に有益に働く微生物、善玉菌)市場を牽引してきた会社です。

東京・渋谷にある本社で執行役員営業本部長の河野春彦さんと営業本部学術営業部部長の福井和夫さんにお話をうかがいました。

動物用医薬品の製造販売の歴史は50年ほど、11名の獣医を含む27名の営業部員が全国の畜産農家をサポートしています。もともとは牛がメインでしたが、次第に豚にも力を入れるようになった20年ほど前、浮腫病の流行に悩んでいた生産者から声がかかるようになったとのこと。

賛助会員としては協会が法人化する前、2004年からのご縁です。現在19社の賛助会員の中でも3番目に古い会員です。きっかけは花岡秀昌・協会認定委員との出会いからだそうです。ちなみに今でも定期的に情報交換されているとか。

「わが社の企業理念は“健康の源は腸にあり”です。それは人も家畜も同じ。協会をご紹介いただいた時に、考え方が似ていると思いました」と河野さん。福井さんも「腸内フローラを正常に保つことで、感染症の原因菌を予防的に削除し、食滞を防ぎ、生産性を向上させる。さらに肉色がきれいでき

さみのない肉になる—SPF豚の特性とも共通しています。豚の健康状態をよくすればワクチン効果も向上します。抗生剤に頼らない、不必要なものは使わない、という考え方はSPF豚農場では理解していただいています。家畜の抗生物質質使用による薬剤耐性が問題となっている中、生菌剤の使用は拡大傾向にあるそうです。

昨年開催した協会創立50周年記念セミナー・祝賀会にもご出席くださったお二人、「祝賀会のSPFポーク料理がどれもとてもおいしかった。やはり健康な豚の肉はおいしいんですね」とおっしゃってくださいました。

PED、CSF、ASF等、問題山積の現在、「生産者の皆さんが一番大変ですね。少しでも力になれば」と福井さん。河野さんも「やはり人、車、物流のリスクが一番高いです。我々も工場の車両消毒を徹底し、消毒ポイントもかならず守るように心がけています。万が一にも迷惑をかけることはできませんから」。

SPF養豚の理念とも重なる同社の企業方針には大変共感しました。薬剤耐性対策としても期待されているプロバイオティクス、今後も同社の持つ最大の強みを発揮され、安全、安心、良質な畜産物生産や農場の生産性向上に貢献していただきたいと思いました。(編集部)

**編集後記**

明けましておめでとうございます。令和も2年目を迎えました。CSFの拡大はどこで食い止められるのか? ASFの侵入阻止は? 大変な年の幕開けです。平柳田中<sup>ひらくしてんちゅう</sup>(彫刻家、1872~1979)の言葉に「今やらねばいつできる、わしがやらねばだれがやる」というのがあります。100歳過ぎて現役だった彫刻家の言ですが、我々の日常にも当てはまると思います。主人公は誰か。防疫意識を高めるにはSPF状態維持のための個々の手法の目的を十分に理解し、上っ面だけでない行動が必要です。「凡事徹底」の水底にあるものと似ているのではないのでしょうか。(世)



**日本SPF豚協会認定農場産シール**  
このマークは  
**日本SPF豚協会**の  
登録商標です

**日本SPF豚協会だより**

第78号 2020年1月1日発行(季刊)  
発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2  
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376  
e-mail:j.spf.a@nifty.com  
http://www.j-spf.com/  
発行人 北島 克好  
編集人 藤田 世秀